

B C 級戦犯死刑囚

河村参郎

(チャンギー監獄 獄中日記)

上田正昭

カントの平和論

平成十九年十二月二日(日曜) 毎日新聞 朝刊。

“時代の風”欄 瀬戸内寂聴(作家)

『カントの平和論 より一部引用とある。』

『そのカントの晩年書いたという「永遠平和のために」という本の帯を書くようにと頼まれて、そのゲラを読み、すっかり感動してカントファンになってしまった。』

『功なり名をとげた老哲学者が、特に書かねばいられなかった永遠平和の願いはどこにあったのか。人間を世界市民的な立場として捉え、従来の教会や学校や国家のための哲学から人間を解き放ち、あくまで、独立の自由な人格を持った人間のための哲学を打ち立てたカントが、なぜ老いの情熱をかきたてて、平和論を書かねばならなかったか。』

『この平和論のあと、八年後にナポレオン戦争がおこり、ヨーロッパは苛酷な戦争状態にまきこまれている。』

『カントが死んだのは、その歴史を見届けた末の八十歳間近の時で、一八〇四年二月十二日であった。』

『平和というのは、／すべての敵意が終った状態を／さしている。』

『常備軍はいずれ、／いつさい廃止されるべきである。』

『国家は所有物でも財産でもない。／国家はひとつの人間社会であつて、／みずからで支配し、／みずからで運営する。』

／みずからが幹であり、／みずからの根をもっている。』

『殺したり、殺されたりするための用に／人をあてるのは人間を単なる／機械あるいは道具として他人(国家)の／手にゆだねることであつて、／人格にもつく／人間性の権利と一致しない。』

『国の軍隊を、共通の敵でもない別の／国を攻撃するため他の国に貸す／などということはあつてはならない。』

『永遠平和は空虚な理念ではなく、／われわれに課せられた使命である。』 (池内紀訳「永遠平和のために」より)

『どの頁を開いても、たつた今、書かれたように、二十一世紀の現実の世界に向かつて発せられているとしか思えないではないか。』

瀬戸内寂聴 彼女も第一次世界大戦 太平洋戦争の戦中派

として生きてこられ、B 29 による無差別空爆、米軍の沖縄上陸、広島・長崎への原爆投下など、忌まわしい戦時体験を経て、戦争回避、平和を願っているに違いない。

いささか私事になって恐縮ですが、私の戦争体験は戦争末期の昭和十九年、当時旧制中学五年生、同学年生徒全員が日本製鋼・府中工場での勤労働員。しかも多摩川寮での合宿、二十四時間、更に三十六時間労働を強制され、勿論授業など全くなく、教師は監督役、軍国主義、全体主義に徹し生徒個人の人格は全く無視、抗議したら、非国民と罵られ、上級学校受験に際し、学校から送付する受験申請書、内申書を握り潰される苛めに遭った。唯一の幸運は工場の空襲を免れたこと。

未だ徴兵年齢に達しなかつたので軍隊経験はない。一九四五年八月十五日終戦。

日本占領

日本政府へポツダム宣言、無条件降伏を勧告。沖縄上陸、原爆投下に脅え、受諾。ラジオの玉音放送で通達され、国民悲痛の涙。

横浜から連合軍進駐、マッカーサーGHQの軍政下に置かれ、深刻な物資、ことに食糧不足、配給だけでは餓死に追い込まれる。そんな状況下で日本国民は戦後復興の夢、希望

復員軍人も戻り、空気が明るくなった。

従順に日本軍は武装解除、爆弾テロ、パルチザンもなく、今にして思えば犠牲は最小限で、賢明だったといえよう。

やたら街を疾走するジープ、紺地に白くMPと抜いた腕章を巻き、白いヘルメットの兵士が目立ち、群がる子供達へチヨコレート、ガムなど投げ与えていた。

やがて昭和二十五年（一九五〇）朝鮮戦争勃発、千載一遇のチャンス、日本は軍需景気に沸き、占領政策にも転機がもたらされた次第。

ちなみにGHQ文書などの公開は一九七〇年代以降になる。かつて春秋時代（BC六〜五世紀）呉の孫子は「彼を知り己を知れば百戦殆（た）うからず」と、情報、いつの時代でも戦闘を交える前に勝負は決すと、将にその通り。

そして全面降伏、果たして国家が解体したらどんな風になるか、辿ってみよう。

『占領戦後史』

竹前栄治著

岩波書店

『アメリカは日米開戦（一九四二年十二月）以前から戦後外交関係のあり方を検討するためソ連から亡命したレオ・パスボルスキーを主任とする特別調査課（SR）』一九四二年二月国務省に設置。同年一〇月政府職員や財界、民間人から広く人材を集め戦後外交政策諮問委員会を設立、同領土小委員会戦後処理政策を検討することになった。しかし対独政策

が中心で、対日政策検討は翌四一年八月SRの中に東アジア班が編成されてからのこと』

『天皇制存続の是非、領土の範囲、戦後日本経済のあり方など、かなり突っこんだ議論をしていた。とくにブレイクスリー起草の「対日戦後処理に適用される一般原則」という文書には、戦後処理の目的、領土・経済・政治の一般原則に触れ、天皇制、武装解除、重工業、賠償、教育など改革の必要性を示唆していた』

なお『日本軍がマーシャル群島のフェゼリン、ルオット両島において敗北した一九四四年三月、国務省は陸・海軍省に「占領地域における民事行政のあり方」についての政策文書を早急に作成するよう要請』

『前記「戦後目的」のほか弾圧立法の廃止、民主化、信教の自由、統治機構の改革、教育の自由化、労働組合の結成、占領軍の構成、領土問題、政党、戦犯、占領の期間と範囲、日本政府権限停止などに関する多くの対日政策の原型的文書が含まれる』

『日本占領』GHQ高官の証言 竹前栄治著 中央公論社
『非軍事化政策としては、武装解除、戦犯裁判、公職追放賠償、軍事施設の解体、戦時法令の廃止、戦力不保持など』
『一九四五年一〇月四日「人権指令」による弾圧法規の撤廃 政治犯の釈放 特高警察廃止、共産党を含む全ての政党

活動の自由化、軍国主義、超国家主義的人物約二〇万人に対し公職追放、婦人参政権付与、選挙年齢の引き下げ、選挙法の改正、最高裁判所裁判官国民審査法による最高裁判事の資格審査など』

『憲法改正、主権在民、つまり天皇は日本国および日本国民統合の象徴（第一条）になった』

『行政権は内閣に、立法権は国会に、司法権は裁判所に属するといふ三権分立制を確立す』

『戦争放棄、戦力不保持、交戦権の否認』

『基本的人権の不可侵性、思想、信条、言論、学問、集会などの自由権、生存権、労働基本権、教育権、人身保護律的规定、男女平等権など』

『封建的要素の払拭をはかり、華族、貴族制度廃止』

『アメリカの公務員制度にならい、内務省解体、人事院の設置、市民警察に改革、民法で家制度解体し父母親権制、均分相続制などとする』

『財閥解体、農地改革、労働改革、教育文面における教育基本法制定などである』

改めて振り返ってみると、太平洋戦争は一九四一年十二月日本海軍のパール・ハーバー奇襲攻撃で始まり、間もなく制空・海権を握られ、いかにも狩猟民族らしく主要拠点を飛び

石作戦で攻略、すでに前記の如く戦後処理政策を検討していたとされ、又戦力は質量とも雲泥の差、勝敗は戦う以前に決したといえ、たった三年ちよつとで沖繩上陸、ポツダム宣言受諾、全面降伏、肅々と武装解除が行われると、逸早く戦後政策が動き出し、外地からの復員業務と同時に、戦犯の割り出しが秘密裏に開始されていた。

BC級戦犯

いきなり話題を変えて恐縮ですが、長年町医者稼業を続けていると、色々な人との出会いがあり、中には四代にも亘る主治医の患家もあって、時に身上相談までされる間柄になっていたりもする。

そんな一家のH夫人、疾うに両親は亡くなり、子供達は親離れ、アメリカの方針通りに核家族化、すでに亭主も逝き、急に心細くなったのが、私の処へ訪れて、ぼそつと身の上話し、何とも奇態な話、彼女の父親は戦後間もなくBC級戦犯として裁かれ、シンガポールで処刑されたという。さめざめと涙を流し、六十年経つた今も戦争は終わっていない。

大変申し訳ないが、「BC級戦犯」戦後しばらくして噂に聞いたことはあるも、戦後の混乱期でもあり、GHQは秘密裏に実行したし、日本政府も関知しないといった風で、多くの庶民は実情を知らない。

戦犯といえはA級戦犯を指し、「平和に対する罪」といった名目で東京裁判（極東国際軍事裁判）が開廷された。

『パール判事』 東京裁判批判と絶対平和主義

中島岳志著 白水社

上記を読む。結果から述べると、戦犯資料は実に長時間を経て、平成十年（一九九八）に至り、ようやく閲覧が解禁されている。

絞首刑 土肥原賢二、松井石根、板垣征四郎、木村兵太郎

武藤章、東条英機、広田弘毅の七名、火葬に付され、海中に投棄されたという。無論、遺族への遺骨返還はない。

東京裁判において公表されなかった逸話の主が、インド代表判事ラダ・ビノット・パール。

対日降伏文書署名九カ国に加えられなかったインド、フィリピンより裁判官指名要求の高まり、ようやく判事席を獲得。パールは熱烈なガンディ信奉、非暴力主義者、ぎりぎり裁判に間に合う。

要点を述べると、パールは当時タブーだった原爆投下にも触れ、戦争に拘わつた全ての国が戦争犯罪を犯したと主張、全被告に無罪判決を下した膨大な意見書を提出したが、残念ながら法廷で朗読されもしなかったし、記述は遺失したといわれる。

そろそろBC級戦犯について尋ねてみよう。

『B C級戦犯』 田中宏巳著 ちくま新書

『B C級戦犯裁判』 林博史著 岩波新書

日本においてはB・C級戦犯を敢えて区別していない。法廷は国内外で四九カ所に達し、A級戦犯と相違して「通例の戦犯」「人道に対する罪」といった罪名の基に裁かれ、逮捕者五七〇〇名、内死刑囚九三四名と伝えられている。

ちなみにB C級戦犯、絞首刑第一号は「マレーの虎」と恐れられていた山下奉文で、「指揮官責任」を問われ、一九四六年（昭和二十一年）二月に死刑執行。

早期に執行した理由として、フィリピン人の反日感情を宥めるために、フィリピン独立（一九四六）を急いだとか風説はあるも、真相は判然としない。埋葬地も不明。

実は先に紹介したH夫人の父親、河村参郎の直属の上司が山下奉文という皮肉な因縁に縛られていた。

補記しますが、田中宏巳防衛大学教授は彼の著述で『戦地に残された日本兵が無事に故国の土を踏めたのは、この裁判のおかげかもしれなかった。もし裁判が無ければ、日本軍に恨みを持つ現地人や連合軍兵士に襲われ、リンチによって、もっと多くの犠牲者を出した可能性を否定できない。この意味で、現地での仕返しを自制し、制御する機能を果たしたといえなくもない』と。

少数のB C級戦犯が犠牲になり、多くの帰還兵を救済し得

たと裁判を肯定した意見

また林博史関東学院大学教授によると、先の華僑虐殺裁判で中国人に阿る必要性が無くなった。つまり『一九四六年六月、中国人主体のマラヤ共産党がイギリスに対して武装闘争を開始、「非常事態」が発生したことで、改めてマレー人を基盤にしたマラヤ連邦へと政策変更を余儀なくされ、戦犯裁判の政治的意味が失われた』という。

判決。死刑者は河村中将、大石正幸憲兵大佐二人に限られ、他は死を免れて、目出たし、この事実、將に時の利といえるだろう。

『文明の裁き』をこえて 対日戦犯裁判読解の試み

牛村圭著 中公叢書

話を掻い摘んで述べると

『当然戦犯収容施設、当時の監獄であれば扱いは厳しかったらう。ことにイギリスオランダのB C級戦犯収容所では、日本軍の捕虜だった兵士を看守に採用するケースがあったように、虐待、私的制裁、リンチが横行し、囚人の自殺が多発したとの風聞がある。また極端な事例では同姓だったための誤認逮捕であったり、結構杜撰な処罰が執行されていたように、特にシンガポール裁判記録の異常に高い死刑執行比率を見ると、その辺の状況が伺えるようにも思われる』

日本で最初に報道されたB C級戦犯に関する新聞記事。
シンガポール裁判情報

『シンガポール大虐殺「山下司令官が命令」 数日間
で500人犠牲 英で証拠の日記を発見』との見出し。

平成八年三月十一日(一九九六)日曜朝刊

改めて手許に残った神奈川新聞、当日の一面を開いてみる
林博史関東学院大学助教授、日本近現代史研究のためロン
ドン滞在中、この折、英軍が公表した極東B C級戦犯資料を
閲覧し、『山下司令官の命令で、辻中佐が統括責任者となり、
警備隊長の河村少将が実行に移すという全体の構図が見えて
きた』と。

『日本軍がシンガポールで行った華僑大虐殺を証言する河
村の「大東亜戦争日記」と、虐殺過程を詳細に供述した英軍
の裁判記録が英国文書館で発見された』とある。

河村日記は東京裁判の目録にも記載され、精細で信憑性が
高く、第一級資料として扱われたことで、センサーシヨナル
に取り上げられたようだ。

河村参郎

日本は日清・日露戦争以後、富国強兵。欧米列強と肩を並
べんと懸命に努力し、いかにも農耕民族らしく、北は樺太か
ら朝鮮、南は台湾と領土を拡大、更に石油を求めて、大東亜

共栄圏構想を練り、先ず満州に傀儡政権を築き、中国、更に
南方へ触手を伸ばしていった。

当時、東京市立尋常小学校、私の通っていた小学校でも、
密やかに軍色が濃くなり、担任の教諭が児童に向かって君
達は将来何になりたい?と問えば、一斉に大声で「大将?」
と答えると、にんまり先生の口が綻ぶ。そんな教育、教室風
景だった。

軍人の鼻鑑、エリート中のエリート、河村参郎の生い立ち、
経歴を辿ってみよう。

牛村圭の著書からの引用

『明治二十九年、加賀藩士鈴木知康の三男として生れる。
父知康は陸軍々人で大尉まで務めた。長兄実は陸軍々医少将
次兄重康は陸軍中将・習志野学校長、錚々たる軍人一家』
参郎少年の将来の方向性は明確に決定付けられていたとい
つても過言でない。

『大正四年(一九一五)東京陸軍幼年学校(十四期)首席
で卒業、同六年陸軍士官学校首席で卒業、銀時計。同十三年
陸軍大学校(三十六期)卒、恩賜の軍刀組。昭和三年より三
年間東大法学部派遣学生。昭和六年より三年フランス駐在』
(注)河村姓は養子縁組による。

昭和十六年(一九四二)十二月七日、日本海軍はハ
ル・ハーバーを奇襲、太平洋戦争へ突入

経歴を続ける。風雲急を告げる折、同年彼は歩兵二二三連隊長、少将に昇進、そして南方作戦準備、第五師団歩兵第九旅団長に任命され、出陣。

翌昭和十七年二月十五日、山下奉文司令官率いる第二十五軍シンガポール攻撃、陥落、直ちに山下が転戦するに及び、河村を昭南警備司令官に任せられ、先の新聞記事で報じられた如く華僑の「シンガポール大虐殺」の張本人として処断される運命が待ってた。皮肉にも有頂天になっていた折だ。

獄中日記 河村参郎遺著

『十三階段を上る』 戦犯処刑者の記録

「家(海田市)から巢鴨へ」

昭和二十一年(一九四六)九月十四日(土)の記述

『戸を割れる様に叩く音で、円かな夢を破られた。強盗にしてはおかしい、警察にしては身に覚えがない。表戸を破って土足のまま闖入したのは、鉄兜に身を固めたMP数名と、日本の警官一人であった。寝衣姿の私を捕へて、部屋の片隅に立たせ、身動きさへも許さない。家宅捜索が始まった。私は多分シンガポール華僑事件であること直感した。』
恐らく四年前の血腥い凄惨な事件の記憶が、とっさに蘇って、血の気の引く思いがされたに違いない。

『日記全部を出せとの事、それに従って提出すると、それ

でも足りないらしく部屋の隅から、押入れの内から、あらゆるトランク、箆笥の抽出、さては天井裏も、畳の下も探して

『

前記新聞記事に河村日記は第一級戦犯裁判資料として採用されたとあり、大本営が重要資料を焼却したことで、誰がGHQに通告したか不明だが、彼の「大東亜戦争日記」の内容は克明に記録された作戦情報だったのだろう。

捕縛された彼は広島の自宅から呉へ連行され、留置所で一泊、進駐軍用列車で東京へ。

九月十五日(日)

『午前八時東京駅に着き、そのまま巢鴨に向ふ。間もなく獄門に着いた。荷物検査、といつても殆ど何も無いが、身体検査、指紋取り、写真撮影、消毒等を終つて1Bの二十四号室に入れられる。三畳の独房である。』

『する事もなく、読む本もないのが退屈の始まりであった。』

『英軍ワイド大佐の訊問を受ける。』

『彼は華僑事件が軍命令であった事をよく知っていた。陳述書を翌日中に完成して提出するやうに命令された。』

九月十七日(火)

『朝 スイトン、コート。』

『十時半からI.P.Sの訊問を受けた。仏印関係である。』

日本語を巧く話す若い少尉が、仏印当局としては、私をA級裁判の検事側証人として出廷させたいと考へてゐたのに、突然の入所で、実は困つてゐるとの話』

『午後三時半から再び訊問を受ける。』

「巢鴨からシンガポールへ」

九月三十日(月)

『まんじりともせぬ汽車の旅は明けて、秋の陽はサンサンとして車窓に降り注ぐ。間もなく呉に着いた。乗船するのだろつかと思つたが、更に汽車の旅を続けるらしい。車窓から眺める山河も、或は見納めかと思ふと、絵に書いたやうな美しい景色も、葬送の絵巻物のやうである。ただ黄金色に稔る些か心を慰めるに足る』

『海田市を過ぎ、例のガード下で、我が寓居をチラッと見ることが出来た』

『なつかしき我が家のチラとガード下』

『我が家のチラとかすみて霽の秋』

『夕刻、岩国で下車した。そこからは飛行機らしい。飛行場衛兵所横の留置場に泊つた』

『新米と新香の味や日本晴れ』

十月二日(水)

『飛行機は午前九時離陸した。瀬戸内海が箱庭のやう

に段々小さくなり、懐しい緑の山々はやがて霞の中に消えて行つた』

『さらばよ祖国、さらばよ妻子!!』

『十三時三〇分、上海に着いた。囚人自動車に乗せられて、郊外の米軍占拠部に送られる。金網の窓を通して映る上海の復興振りは目覚ましいよつである。』

『夜が冷やかに独房を訪れる。二、三階の囚房から「海行かば」の合唱が厳かに聞える。今夜は戦友の誰かが絞首台上に送られるのである。異国の第一夜は惨として更けて行つた』

上海から香港そして

十月八日(火)

『十四時サイゴンに着いた。軍参謀長として幾度か離着陸した思出の飛行場であるが、今日は俘囚の身で、剣付鉄砲の出迎えを受けよつとは誰が予期し得よう』

『フランスの中央監獄が、一夜の宿である。仏当局が嗅ぎつけて、審判事務所に連行、約二時間に亘り訊問を受ける。』

軍参謀長時代に、夢にも知らなかつた我が将兵の非行、悪業を知らされたのには驚かざるを得ない。真か、偽か？ただ啞然たるのみ』

サイゴンからシンガポール 「チャンギー監獄」

十月十一日(金)

『英軍將校から、マレー戦史を約三週間の予定で書き上げるやう命令される。そのために、机、椅子、文房具、地図等を貸与せられ、久振りに机につき得たのは嬉しい事であった。早速仕事にとりかゝった』

『戦史の記述は四年前の事とて、記憶も不正確でホトホト困つた。ただ日本軍の將官として、英軍に嗤はれないようにと、努力を傾注するだけである』

十月二十六日(土)

『巢鴨にゐた間は、却つて望郷の念が強かつたのに、シンガポールに来てからは、諦めがついたのか弱い心が消えて、却つて冷静となる事が出来た。チャンギーに抑留されてゐる約二千の將兵は、何れも巢鴨収容者に比べて、明朗快活さを感じさせるものがある』

『戦ひは終つた。今後の平和建設が成功するか否かは、勝者の敗者に対する寛容如何にあると謂つても過言ではあるまい。翻つて思ふ、日本軍が緒戦に勝つたとき、更に上下一致して敗者に同情する襟度があつたなら、戦敗後の今日に於ても、列国の態度に相当の変化を見たであらうに』

『勝つて驕らない謙虚の態度こそ処世の根本である』

『マレー戦史の草稿が漸く出来た。当時を回想して万感無

量。引続き敵性華僑の掃討作戦に筆を進めるとき、当時の軍の方針が蔽に失した事を痛感せざるを得ない。更に軍をして、このやうな態度を取らざるを得ざらしめた真因は、小兵力に過大な任務を与へ、僥倖を期待しようとした軍中央部当局の方針にも反省を必要とする点がなかつたであらうか』

『真珠湾奇襲と、その軌を一にするものである。開戦に決した以上、軍が最も忠実に任務を遂行するためには真に己むを得ないものがあつた』

『そこに開戦そのものに無理があつたのではなからうか』
今後日本が平和国家を維持するために、有能な政治家がシリアン・コントロール実施。高度情報収集能力があれば、あの様な軍部、特に大本営の逸脱した行為は抑制し得るだらう。真摯にBC級戦犯として処刑された河村將軍らの慟哭の声を忘れることなかれ。

十一月二十一日(木)

『毎日の暮し方をまとめて書かう。午前五時半起床であるが、五時過ぎには、英兵が「起床!」と連呼しながら各室の鍵を脱す。一般のものは、すぐに点呼の後に外へ出るが、私達は引続いて床を上げ、二人で室内の掃除、雑巾がけ、終つて水浴(シャワー)東方を拝して皇國の復興を祈念し、家庭の幸福と、妻子の健康を心から祈る。その後一人とも二十分位、トランプの独り占ひ等をする間に朝食となる。(六時半頃)

食事は赤大根、人参等が「切れ、三切れ、浮いてゐるスープと、ビスケット四糶四方のもの二枚だけである。少々不足を感じる。茶に砂糖の入つたものが時たま恵まれる。』

『室の広さは約二間四方、高さ二間半か、庭に面する側に一尺に四尺位の高窓が一つ、廊下に面する側で入口の扉の上に一尺に二尺の小窓が、何れも鉄格子と金網で張られている。床はコンクリート、壁は下部以外は白く塗られ、室内に洗面台と水洗便所がある。』

『毛布は各自一枚であるが、私達は特に一枚増加されてゐる。その二枚をコンクリートの上に敷き、一枚を掛けて寝る。別に寝台はなく、床の上に、脱いだ衣服を丸めて枕にするだけだ。』

『作業用として特別に折畳机と、椅子が与へられてゐる。午前五時半はまだ真暗で、六時を過ぎると東天が微かに白んで来る。』

『七時頃から約三十分、戸外広場の散歩、朝夕二回の運動のため、靴の裏が減つて、今では殆んど全員が裸足である。被服は獄衣（正服）で番号入りの半袖、半ズボン、色は未決は鼠、既決は茶褐色である。』

『でも上半身は殆んど裸体で暮すのが普通である。』

『八時から九時までは、牟田口大人と囲碁、九時半から作業時間と定められ、読書、記録、整理、所命の報告書き、二

コースの翻訳等で、十時頃警備中隊長の巡視がある。不動の姿勢を時に矯されるのは苦笑の至り。』

『昼食は十時半から十一時の間で、肉またはサージンを少量入つた馬鈴薯等を主にして、米を少し混ぜた「オヂヤ」である。毎日同じようなものだが、それでも昼食だけはどつやら満足感がする。野菜類は殆んど細切れの乾燥野菜である。』

『午後は囲碁数回、それから約一時間読書等、その中、夕食になる。午後二時から三時の間で早いには閉口する。野菜の塩汁に、何処の産か「ナツメ」を加工したやうな練菓子よつものものを、切餅程度の大きさに切つて一片だけ。昼食との間が短いため、それで結構だが、夜半には、空腹で眠れぬことが度々ある。』

『夕食が終り、午後四時頃には戸外散歩、それから水浴と囲碁数回で、午後七時頃になると、日はとつぱり暮れる。かくて一日の行事を終つて、午後八時頃床につく。』

『電気は廊下に面した上方窓の外側にあるだけで、その光が網戸を通して入るため、薄暗いが囲碁程度は出来ぬ事もない。』

『将校連の巡視は夕食の前後が多い。巢鴨では、米軍が成るべく早く軍人離れするやうに要求したが、ここでは不動の姿勢と、敬礼の厳格を要求される。英米西国の差異であり、面白い対照である。』

河村日記はチャンギー監獄での英軍の戦犯取扱い方の告発というより実録で、情け容赦もない非人道的な処遇を具体的に触れ、若しかして英国は勝者とはいえ、戦争の強力なダメージで想像以上に国力の衰微があったのではないかと述べているよう。

「春来れども」「勝者の裁き」

昭和二十二年二月二十五日(火)

『 昨夕、すぐ近くのP「ホール」から軍歌数曲「海行かば」「君が代」「蛍の光」等の合唱が聞えてきた。愈々処刑者があるのだらうと推測していたところ、果して某参謀以下十名の実施が申渡された由』

『 Dホールは、Pホールに近いため、予定時刻の九時になると、これ等受難者の唱へる「萬歳」の声に引続いて「ズシン」と絞首器が落下する音が地響き立てゝ聞える』

『 居室から、その方向を伏し拝んで、難友の冥福を祈った。』

三月十日(月)

『 八時出発、手錠をはめられたのは不快だが、久振りの郊外、市内の風景、婦女子の姿を見るのも心やかなものを感じる。』

『 公会堂で、鳴物入りの公判が開かれるのである。写真班

の連続射撃を受けて、被告席に悠たりと落着いた。初日のせいか、傍聴人も一杯である。』

『 炬上の鯉のごと唯いさぎよく』

四月二日(水)

『 最後の日と直観した。午前十時から約一時間半に亘って辨護士に代り「アドバイザー」ウエイト大尉は辨護の論文を朗読した。要旨は当時の華僑に敵性活動のあった事を挙げ、日本軍としては、緊急自衛上やむなく採った行動である事を立証し、それは国際法上も認められる所であるとして、掃蕩作戦の合法性を立証し、次いで右の点に、たとへ疑問ありとするも、それは山下將軍の責任であつて、命令に服従した被告にはその責なしと、我が國軍の命令は絶対服従を強調し、更に各個人につき情状酌量論を述べたやうである』

『 次いで検事側の論告があつた。内容は不明であるが、右のやうな緊急行為は、英法の認める所ではなく、一般民衆をこのやうに殺害した行為に関しては、関係被告は、何れもその責に任すべく、上は監督不行届であり、下は、生殺与奪の権を濫用したものであると、断じたやうである』

『 晝食後、何れも有罪の判決があつた 一日休憩の後午後四時半、判決を言ひ渡された』

『 無期 中将 西村琢磨』

『 絞首刑 中将 河村参郎』

『同 大佐 大石正幸』

『無期 大佐 横田昌隆』

『同 中佐 城 朝龍』

『同 少佐 大西 寛』

『同 大尉 久松晴治』

四月二十六日(土)

『田中僧侶の来訪があつた。今日から「思出の記」を書いてみる事にする。何かの本にあつたが、エフマンはその著、自然論」で「たとへ誰一人私と共にあるものはなくとも、読み書きをして居れば、私は孤独ではない」と述べたと云ふが實際その通りである。現在のやうに死を待つ身にも、良書は最後まで憂鬱を晴らしてくれる。過去の思出を筆にするのも、幾多の知人知己と再び相会して語るやうな感じを与へ、孤独単調を救つてくれる。「思出の記」も畢竟、現在の生活に、追憶の快感を蘇がへらせて貰つて一段である。内容はどつあるうとも、兎も角筆を進めよう』

五月十三日(火)

『東京から米人弁護士が来訪したところ、我が留守宅からの書簡と眼鏡を持参して下さつた由』

『既に四月四日の新聞で予め判決を知つた後のもの、何れも諦めの中に、将来の奮闘を誓つてあるが、その文面の裏に秘められた悲痛は歴然たるものがある。思はず落涙した。併

し何としても致方のない事、書面のやうに将来の大成と発展とを唯祈るのみ』

『春子の手紙に現はれた情愛犇々と胸に迫る。嬉しい反面春子の心情に対し、誠に気の毒、憐憫の情に堪へないものがある。 筭生活で、毎日身の皮を剥く暮しでは、果して経済的に許される事だろうか。早速返事して、その時に応じざる善処を望んで置いた』

『一同既に判決を知り、父への、夫への最後の書面として書いた文の一字一字に、血と涙が滲んでゐる。この返事は加久田弁護士に依頼するが果して何時届くであらう。六月初旬だらうか』

『我が裁き知りて妻子の送る文』

悟りし善の心みだれぬ』

『殊勝なと妻子の心憫びつ』

やがてよき日のあらまほしと思ふ』

『此の悩み切り抜けてこそ明らか』

光りあらまし努めよや皆』

「死を以て抗議する」 河村死刑囚 51歳

在シンガポール 英軍最高司令官閣下

一九四七年六月二十五日 日本陸軍中将 河村参郎

『私は御承知の如く、英軍軍法廷の判決確定により、明

朝天国に向ひ旅立つ者であります。夫れ人の將に死なんとするや、その言や善し、まさに傾聴すべし」とは、東洋の格言であります。英軍司令官並びに幕僚各位に於かれては、何卒以下私の申し述べる所を、邪念を排して、虚心坦懐に熟読玩味せられ、現在尚ほ行はれつゝある軍事裁判を冷静に觀察し、これに反省を行はれ、かくして速にその誤りを矯正せられ、以て世界永久の平和確立に向ひ、雄大なる寄与をなされる如く施策せられん事を衷心より希望する。』

の序文に続き、命令絶対服従問題に関し

『畏くも勅諭に明示し給ひ、陸海軍人誡法』に於て、上官の命令に直に服従すべきことを示され、吾々は之に宣誓し、署名捺印してゐる。

『軍隊といふ特別の目的存在を、戦勝なる特殊の用途に使用せんが為には、その命令服従の絶対性なるものは、何としても保持すべきものなることは、各国共通の事象ではないでせうか。』

『命令絶対服従の理念下に行へる受令者の行為に關しては無責任』

と主張し、単なる戦勝国の復讐行為に過ぎないと訴えてゐる。

前記意見書と同日

在シシガポール華僑代表殿

『華僑諸君、もし私の死が、諸君の該事件に關する對日憎惡の感情の幾分にて緩和し得る事になるならば、私の深く喜びとする所であり、且感謝する所であります。』

河村將軍が最期に謝罪文を提出されたことに、滿腔の敬意を表する次第。

『BC級戦犯 60年目の遺書』

日本の戦争 田原総一郎 監修 田中日淳 編

堀川恵子 聞き手 アスコム

装丁、表紙の裏に略歴が記述されている

田中日淳

『一九一四年、北海道生まれ。一七年に得度受戒。四〇年立正大学文学部仏教学科卒業。同年、徴兵により終戦まで軍隊生活を送ることとなる。四五年、シシガポールの陸軍第三航空司令部で終戦を迎え、四六年十二月から四七年八月までチャンギー刑務所にて日本人BC級戦犯の教誨師を務めた。八八年に日蓮宗大本山池上本門寺第八一世貫主、九五年には第四八代日蓮宗管長に就任。著書に「法華経を生きる」(春秋社)がある。』

本文から『確かにチャンギーはわたしに、自分が僧侶であるという気持ちを確かめさせてくれた場所でもあります。』

あのような境遇にある人たちと出会い、その最期を見送つ

たことで、本当に心から経を唱えました。チャンギーはそういう意味でも、自分自身はこうでなくてはならないという気持ちを持ちを起こさせてくれた場所でもあります。だから、わたしとしては自分の坊さんのルーツはここにありと思うています」

「死刑執行まで」

昭和二十二年六月二十六日のメモ

『最後の夜私も晚餐を共にさせて頂きました。三名の方々は久し振りの御馳走に舌鼓を打ち「中々の御馳走だ鰻の蒲焼がある」「上等の寿司もある」と云ひ乍ら作業隊の戦友が乏しい中から奔走して求めたこの饞けに「有難い有難い」と感謝の言葉を連発し乍ら一つ一つゆっくり味はわれるのを見てゐると美しい人情に結ばれた光景が只心に深く刻み込まれる思ひでした。

そのうち各々満腹の態でしたがその間色々の昔話や裁判の話はては本日と言渡官の来訪の際、既に皆んな充分覚悟が出来てゐたので、大笑ひとなつたこと、一緒に来た英下士官等この様子を見てびっくりしていたなどと話しました。そして一つ腹ごなしに「オドリ」をやりませうかと、真先に立つて豪傑節を踊る大石（大石正幸陸軍憲兵大佐）さん、続いて河村（河村参郎陸軍中将）閣下の「切られ与三郎」の独芸、声

のいゝ合志（合志幸裕陸軍憲兵少佐）さんがお一人の注文に応じて色々の歌が続けられ皆なで「内地の昔を思ひ出すね」と言ひ乍ら爆笑又爆笑でした。なごやかな清い本当の最期の晩でした。「Dホール」からは逐次色々の歌を饞けてくれました。その度に「元気でいきますよ」「皆様も最後まで頑張ってください有難う」と姿見えぬ戦友達に感謝していました。「こんなに死んでいくなんて考えると幸福だよ」と言つて、真に心からなる笑顔を見ると、この空気にとけ切れずに居る私がむしる胸掻き筆しられる思ひでした。こないゝ人達をと云ふ生きてゐる人間の愚痴が何処かで自分を責めてゐる様な圧迫を感じてゐました。何処にも暗い翳がありません。童子の晴々とした朗らかさです。

この明るい雰囲気が高潮になり、皆んなの饞けも終る頃「日本人だ最後は白飯と味噌汁を食べませう」と云ひ乍ら少量でも之をかみしめるのを見ると本当の軍人の日本人の姿に接した厳肅な気持ちがありました。明日又参りませうと云ひ乍らつきぬ名残りでこの宴を終り、清々した水浴で身を清め乍ら最後の房に入るのを見とどけて辞去しました。

明けて早朝御一緒に法華経を誦し訣別致しました。

「元気でいきますよ」「お先へ」「左様なら」「お世話になりました」微笑し乍ら挨拶され往かれる御姿は尊くも気高い限りでした。

身は死すとも祖国を永久に栄へよとこれが行く人々の誰しもが胸に秘め心に抱いてある事です。誰か泣かされぬ者がありません。感動させられぬ者がありません。

諦観した心境に清い祈りを誦しつつ逝つた人々の姿が今も尚私の胸にはつきりと香しく焼付けられて居ます」

明朝絞首台に上る三人の晩餐會、御馳走を楽しく食べ、有難いと感謝しつつ、酒も入らないのに、歌ったり踊り、童兒の様な朗らかさで笑い倒ける姿は、そこに恰も五百羅漢石像に命が吹き込まれ、皆で手を取り合っているよつ。

死の恐怖、恨み辛み、怒り悲しみ、全ての欲望、そして苦惱、仏教でいう四苦(生病老死)八苦も消えている「ホトケ」達よ。

教誨師とは仏教によつて受刑者を諭し、導かんとする仕事。最も慌てたり、戸惑い、驚いたのは、いや未熟さを痛感したのは田中日淳自身だったに違いない。

「持ち出しを禁じられた遺書」

『公には遺書を書くことは許されていませんでした。もちろん、それを外に持ち出すことなどもつてのほかです。

見つければ厳しい処分が下され、持ち出した人間も監獄に放り込まれることになります。それでも死刑囚の人たちは、一縷の望みにかけるかのように、さまざまなものに遺書を書い

ていました」

『どんなに遺書を書いておいても、処刑された直後にことごとく遺品とともにポイラーにくべられて燃やされてしまつたのです。実は私が着任する前の教戒師がやっていたことがありました。それは遺書をこっそりと持ち出して、自分の宿舎に持ち帰り、それをさらに書き写して保存しておくと言うやり方です。きつと前任者も、彼らの思いを後世に何としても伝えたいと思つて危険を冒したのだと思います。それで私もそれを実行することにしました』

『遺書を持ち出すとなるといくつもの関門がありました。少しでもしくじれば、自分が罰せられるだけでなく、私が持ち出した遺書もすべて没収されて、さらに警備が厳しくなり、もう二度と遺書を外に出せなくなります』

『とにかく私は遺書を兵舎に持ち帰り、また別ルートで届けられた遺書を毎夜毎夜、一枚一枚書き写しました。日中はPホールに通つて、夜は兵舎で遺書を書き写すのが私の日課になりました』

「遺書を日本へ」

田中教誨師は昭和二十二年九月、復員船「日本丸」(現在横浜に展示係留中)で帰国。

『困つたなと思ひましたね。だつて遺書には、当時の軍上

層部に対する憤りが書かれてあるものもありましたし、刑務所でのイギリス軍の私刑などいかに待遇が劣悪非道だったかも記録している内容のものもありましたから、見つければ没収されて廃棄されることは目に見えていました。』

復員官から日本丸の船長に相談

『日本丸が復員のときには佐世保にあがるが、佐世保には遺書の入ったかばんはあげないでくれ。そして別の港結局、広島の子品だったけど、船を追いかけて汽車で広島で降り。子品港へ』

『子品港には陸軍の留守部隊がいて、榊原大佐から遺書の荷物を受け取ることができた』

奇しくも榊原大佐は前述「獄中日記」の河村参郎の親戚だった。

『田中さん、こういっわけだ。東京へ出たら河村春子さんがいるから、チャンギーの話を聞かせてやってほしい』

第二部

『遺書 一一八人の最後の言葉』

あとがき

今から六十年前、日本は太平洋戦争に敗戦。立場の相違か

ら国民感情は悲喜交々。間違いなくいえることは三百万とも四百万人ともいわれる戦争犠牲者の存在、決して忘れるべからず。

いささか私ごとで恐縮ですが、殊に申し訳ないことはBC級戦犯について、私は関心も知識も持ち合わせていなかったこと。

戦犯ご家族を目の前にして、ただ「お気の毒に」「御愁傷様」「運が悪かった」「苦勞でした」としかいいようがなく、全く不甲斐無い。

お陰で河村獄中日記「十三階段を上る」を丹念に何度も繰り返して読ませていただいた。

河村戦犯がチャンギー監獄に収容されて間もない十月二十五日の記述に、

『ユーゴー曰く「人間は生れ落ちたときに、既に私刑を宣告されてゐる。ただ無期執行猶予に過ぎない」と。その猶予が取り除かれた日こそ死刑執行の日である』

『そのやうに考へると、総ては運命と観する以外にはない。それをヨクヨク考へるのは愚の骨頂だ。どのやうな事態が突発しても、泰然とそれに処する修養こそ、日夜努むべきではなからうか』

秀才の彼は先ず知識から死刑を運命と諦観、諦めようとした。しかし実際は頭で理解したとしても、そう容易に死の恐

怖から逃れられるものではなく、精神的葛藤にどう対処したか。

どうやら彼は天才でなく、飽くなき努力の結果が才子と呼ばしめたようだ。

何故なら、彼が広島でMPに戦犯として逮捕された際、家宅捜索で押収された書類「大東亜戦争日記」など、後に第一級戦犯資料として採用されているのであり、如何に正確、詳細な記述だったか、想像を超えるものだったに違いない。

一般的に日記はメモ、要点のみ記すはずだが、彼は「獄中日記」にしても、日常生活、環境などの模様を淡々、細密、しかも随筆風に綴り、自分自身と語り合っている様な感じで、孤独、無聊を紛らわせていたのではないか。

恐らく河村少年も几帳面な性格で、「習性」と成る「精神統一」を容易に可能にしたと思われる。

ちなみに精神統一の効用という用語弊になるので、禅者に伺ってみることにしよう。

『法光』 秋彼岸号 平成二〇年（2008）2336 発行 臨濟会（禅宗）「作務とその心」 龍源寺閑栖 松原泰道

『作務は労働の禅語で、呉音でサムと読み、意味は（任）務を作す（する）こと、単なる自分の任務でなく「菩薩（仏教修行者）の修行」です』

『中国唐時代の禅の高僧百丈禪師は、八十歳を越えても作

務を止めないので、弟子達は師の健康を案じて農具を隠します。師は已むなく作務をやめ、それからは食事を取りません。弟子達が理由を問うと、「一日作さざれば、一日食わず」という、有名な言葉がはね返ってきました』

『それは二十世紀のロシアの革命家レーニンの「働かざる者は食うべからず」とは次元を異にします』

諄くなりますが、仏道修行における作務・食うことも無功德、無所得。何の欲望が無ければ苦悩などあるはずがない。

河村戦犯の「獄中日記」必ずしも家族へ届けられる保障はないのに、日々丹念に綴り続け、決して荒げたり、憎々しい表現はなく、不思議に爽やかさ、ユーモアさえ覚え、実に素晴らしい文章。

この日記、若かりし日の田中日淳師が奇跡的に故国へ持ち返えられたのですが、心から感謝する次第。

最後に余談になりますが、敢えてノンフィクションを強調するため、参考書籍はそのままの文章、文体で表記、抜粋してみました。

「批判を乞う。」

ジエネリック広場の

フリーター達

陶 易 王

30から40床が並んだ大部屋の、フリーター達が休んでいるベッドの間をゆっくり歩いて、一人ずつ診察して行く。彼らは幼い頃から健診には慣れているから、前に行くとき黙ってシャツを捲り上げ、胸を出して診察を受ける。

「おはよう」と声を掛ける。「おはよう」と答える人もいれば、「……」と黙っています」と言葉を省略して答える人もいる。中には漫画本を読みふけって、よっぽど本が面白いのか、診察中片時も本から眼を離さない人もいる。

聴診器をシカトしているみたいだ。

彼らは反抗的ではない、素直な子ばかりである。多くは静かに診察を受けている。

余計な雑談はしない。

彼らはトイレ、歯磨き以外は、ベッド上安静を保つ。病院から出る食事はお茶、水以外は経口摂取できない。もちろん

アルコール、タバコは禁止である。

治療薬投与の後は、時間毎に採血、採尿、血圧、心電図等の検査を続ける。

入院は薬剤によって違つが、3日から1週間である。

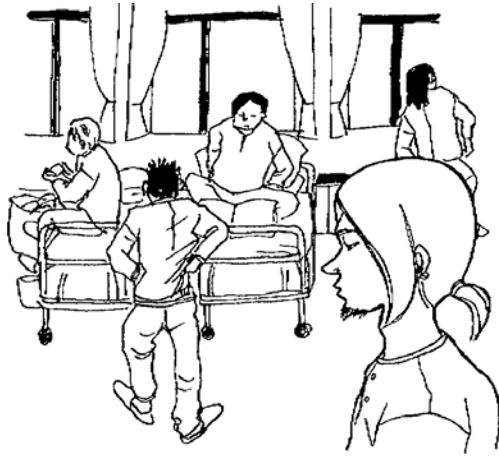
彼らは入院時、書物、携帯電話、CD、MD、ウォークマン、ゲーム機器等を持ち込んでいる。殆んど全員が持っているのが、ノートパソコンである。多機能だからテレビも見られるし、音楽も聴き、メールによる外界と連絡も可能で、退屈はしないだろう。

イヤフォンか、ヘッドフォンを用いるから、病室の中は静かで他人を妨げない。

彼らの読んでいる本は、六法全書、公務員試験問題集、大学入試問題集、自動車運転免許試験問題集、歴史書、コミック文学全集など。最近は文学書も、レ・ミゼラブル、モンテ・クリスト等西欧の名作・文学書、三国志等の歴史書もダイジエスト版としてコミック本で読める。病棟の本棚にも、一応の図書は用意してある。手塚治虫のブラックジャックもある。治療に参加するフリーター達は、学生、浪人、無職などで、初期の頃は、刺青を入れた、やくざめいた人も混ざっていたが、今では全く居なくなつた。

治療に直接影響はないから、彼らの髪形を制限しない。普通のスポーツ刈り、長髪など。肩まで届く紫式部タイプの黒

髪は長く、それをリボンで縛っている人もいる。前から髻面を見なければお嬢さんかと思う。何人かに1人くらい、スキンヘッドがいる。勿論その人の自由で髪型について干渉しない。



ピアスも別に禁止してないから、いつも何人かいる。普通、耳ピアスが多い。たまに鼻や、唇ピアスもいる。臍や乳ピアスは露出部分ではないから判らない。ピアスの為に局所の炎症を起こしたりすると、血液検査で白血球増多が見られ

る可能性があるので、気をつけねばならない。

回診しながら、ふつと昔の陸軍病院を思い出した。陸軍病院の院長総回診、軍医中将が婦長を従えて歩いて来る。白衣を着た傷病兵は直立不動敬礼、起きられる人はきちんと正座し、手足に包帯を巻いたまま、ギブスの手を下げ、院長の前にな垂れて敬礼し、回診の終わるのを待つ。厳粛で悲壮な感じがする。

さらに回想は、アウシユヴィッツに飛ぶ。気の毒に、ナチスに拘束されたユダヤ人の捕虜を思う。粗末な蚕柵にぎゅうぎゅう押し込められた哀れな囚人たちは、狭い蚕柵では起き上がる頭がぶつかってしまふ。ナチスの医者が時々回つて来て、瘦せた手首を握って脈を調べ、眼瞼をめくって次の犠牲者を決めたものである。

もつ、この様な事は二度とあつてはならない。

ジェネリック治験のフリーター達は、20歳から30歳までの選別された健康男子である。

彼らはヘルシンキの人権宣言で守られているから健康を害する心配はなく、安心だ。

ジェネリック治験医師は1日数回、回診する。元来健康人だから異常所見はない。

しかし風邪をひいていたり、花粉症で水っ涙をたらした人がいれば、それは除外する。血液生化学検査で、僅かに基準

値を超えるCK高値を見ることがあるが、本人に聞くと、数日前にマラソンなど激しい筋肉労働をした為とわかり、許容範囲と解釈して、事後追跡検査で正常に復することを再確認する。

欧米の文献では、通常白人・黒人・アジア人と分けて記載される。地域によって、純血、ハーフ、クワドルン等と分けられているが、混血は複雑で簡単に理解出来ない。

ジェネリック被験者の容貌は、百人百様である。縄文系・弥生系で、欧米系はいない。

日本人の体臭は、欧米人程強くないが、入院して数日もすると多少は臭つて来る。警察犬のように、我々でも嗅ぎ分けられる。数日もすれば慣れ、それ程我慢できない程ではなくなる。

ジェネリックの被験者は、毎週、グループが交代する。病室の窓を開け放して、空気を入れ替える。

入院してくると、先ず事前の問診、診察、検査、心電図、血圧、採血をする。

投薬の後、薬剤によって違つが10分、20分、30分毎に薬剤の血中濃度を測定、血圧、心電図、採血検査を繰り返し安全性を確かめる。このデータを先発薬と比較し、検討したものが生物学的同等試験である。これが基礎になつて、後発薬である「ジェネリック医薬品」が開発される。

被験者の食事は病院で提供するが、特にクレームが出た事はない。

治験対象は健常人だから、本来の作用の他に、本人の固有の反応もある。概ね無視できるが著明な反応があれば、有害事象として、記録される。

ジェネリック医薬品は、この様にして誕生する。

有効性、安全性、副作用等もすべてクリアされているから、問題は無い。

これらの「生物学的同等性試験」に合格すれば、厚生労働省の認可を得て後発薬品として登場する。厚生労働省は、ジェネリック薬品の使用を推奨する。

なぜか？

価格が安いから厚生労働省の医療費抑制、低医療費政策に合致するからである。

先日たまたま、黒澤明監督の映画、「赤髭を見た。幕府の経営する小石川療養所で、経費削減の命令が出て、赤髭が患者と一緒に怒り出す。

一方裕福な大名は飽食して肥満、今で言うメタボになつて動く事すらままならない。

富裕層と貧乏人、低医療政策の図式は昔も今も変わらないようだ。

(一)

比べ、はるかに安全性の高いものが売られている。これは大きな進歩です」

「けれど、そもそも毒性の強い薬が増えたから薬害が増えたわけではありません。製薬企業を裁いただけで、ことは解決しません。ひとつに、薬そのものより医師の使い方が悪かったという事情があるからです。もとをたただせば私も含めて医・歯系大学の教え方がよくなかった。極言すれば薬害の根源は、大学における薬物教育の欠陥にあった。そこが今も改まっていない。だから「薬知らず」の欠陥医師は減らず、その社会的副作用である薬害も減る見込みはない、と私は言い続けてきました」

当の専門家からそうはつきり言われては、あつ
けにとられて、二の句がつけません。

「今も多くの大学で教えているのは、薬を化学物質としか見ないカメの甲（化学構造式）中心の基礎薬理学です。それも十年間に一人つくればよい教授後継者レベルの知識を全学生に要求して、日常診療に役立つことはほとんど教えていません。患者さんに直結する臨床薬理学の講座は、まだ全国で五つの大学にしかないありさまです。教科書の内容も、薬の主作用ばかりで、恐ろしい副作用のことは、ほんの付け足し

程度です」

「もともと病人を診ることが不得意な人びとが、基礎医学の薬理学の教師にもなっています。医・歯系大学の増設で、最近では医学部出身でない、薬学、生物学部出身の教師が増えている。病人をよく知った臨床薬理の教師を増やすべき時なのに、実際はその逆を行っている。そういう構造的な原因が薬害の背景にはあります」

砂糖をとりすぎる

問題はその結果、診療の第一線でどんなマイナ
スが起こっているかです。

「熟練した実地医家なら当然防げる副作用事故を、つかつにも小さくさまざまに起こしているのではないのでしょうか」

「薬の副作用は患者さんの体質・体調と薬物の組み合わせから起こります。日本人の場合、その体質が戦後どんどん変わってきた。とりわけ食生活の影響が大きい。なのに、この変化をしつかりと調査・追跡している大学・機関がありません。そのうえ医薬品も、相変わらず健康で正常な動物を薬理実験に使っています。体質が悪くなった患者さんに、そういう薬を使って適切な処方をするのは、だれが考えても極めて難しいことですよ」

「いい例が子供らの体質です。体格はりっぱでも、反射が鈍くてすぐに転ぶ。簡単に骨が折れる。血が出たら止まらないう。まっすぐに走れない。木登りができない。眼も歯も悪くて皮膚も弱い。こつした体質の劣化はすべて、親が砂糖・リン酸を多量に含む間食、お菓子、ジュース、炭酸飲料類を無制限に与えすぎた報いです」

「幼い、そんな半病人たちは、体内のカルシウムを砂糖の毒性中和で消耗したための『脱カルシウム症』と理解されます。カルシウムの足りない体は、全身に炎症をもっているにひとしく、薬の副作用も火がつきやすいから、投薬にはよほど注意が必要です」

と聞くと、砂糖のとりすぎは大層こわい気がします。

「平均的な安全の目安は、五、六歳の子で日に角砂糖一個（六グラム）というのに、かんジュース一本に三〇グラム前後も含まれている。東京の子は日に九〇グラムもっている、との調べがありました。学校給食もこの点の配慮に欠けています」

「ネズミだって水と炭酸飲料を並べておくと、直ぐに水を飲まなくなります。やがて炭酸飲料の水割りにまで見向きもしません。こわいのは習慣です。私の教室では、「一億総砂糖づけ」の体質に見合うネズミを各種つくって、副作用予知の

薬理実験を重ねていますが、大切なのは薬の改良より病気に強い体質づくりです。今は母体そのものがカルシウム不足ですから、乳幼児の早い時期から、とにかく甘いものを遠ざけて育てることです」

太りすぎの体質も薬物ショックを招きやすい、と聞いたことがあります。

「栄養もとりすぎればゴミ公害と同じことです。肝臓が疲れ果てて、薬（つまりは毒物）の処理能力が落ちますから、投薬上の要注者になります。薬物ショック死者を解剖したら、肝疾患でない人ひとにも多く肝臓機能障害が見られて、その中の多くが過労さみであったとの報告もありました。過労の患者さんには、原疾患のいかに問わず肝がよわつているとみなして、投薬すべきだ、と警告しています」

効かぬ「カンフル」

薬効再評価の結果「無効」とわかった薬を、医師が知らずに使って副作用事故を起こした例もあると聞きました。

「そいつのが、いちばん罪深いし腹がたちます。厚生省

は当初なぜか再評価情報を出し渋っていたが、背に腹はかえられなくなつてか、最近ではデータをどンドン吐きだすようになつた。薬の勉強を怠けて、保険点数の講習にはかり熱心な医師たちは、起こすべからざる凡ミスで、こつぴどいめにあいかねないと覚悟すべきです」

「戦前から『起死回生』の代名詞になっているカンフル剤も、五十年の再評価で強心剤、蘇生(そせい)剤としては無効とされました。その十五年前に私はそれを突きとめ、教科書にも明記して注意を促してきたのに、だれも耳を貸さうとせず使い続けた。ピタカンの注射はすこく痛いものです。あれを一発つと死にかかった人がパチツと目を開いたりしたのは、薬が心臓に効いたのではなく余りの痛さに驚いての反射に過ぎなかつた、というわけです」

「歯科や耳鼻科、外科で局所麻酔シヨックの時これをつつたら強い副作用を起したとの実例が少なくありません。もはや一般の辞書も改められつつありますし、注2、文章や演説に「カンフル剤的效果などを使うのはやめるべきです。まして医師が習慣的気休めに注射するのはよくありません」

そついつ、無効でときには有害なものまで含め「薬漬け医療」なのかと思つて、本当にそら恐ろしく

くなります。

「三つの症状を示す人に三通りの薬をやつたら体内でどんな相互作用を起すか、というシンポジウムが最近やつと学会で開かれています。そんな基本的なことを今ごろ? と、あきれるでしょうが、副作用薬理学の研究はまだそれほど遅れているのです」

「それと『薬づけ』も医師たちは大学で教つた通りに処方しているだけなのです。ある大病院の処方せんで調べたら、約二〇%が一枚当たり六種類以上、最高は同十二種類でした。多くの大病院がこつてしようし、一枚当たり五種類は平均的です。使用薬剤の上位から五番目までは、健胃消化剤、複合ビタミン剤、精神神経用剤、解熱鎮静剤、整腸剤の順ですから、相互作用の問題はこのあたりが中心になるかと思ひます。無益でも無害、当たりさわらないつもりで多剤処方するのだから、体質と関係があるし、とくに精神神経用剤は胎児などへの副作用があります」

「しかし、一方では良心的に適切な処方・診療に努めている医師も数多いのです。が、診療所・病院のハシゴをして歩く患者さんが多い。最初もらつた薬がすぐに効かないと、せっかちに次の医師を訪ねて薬をもらいたがる。ふるしきにひと包みもの薬を抱えて飲んでいたので、何が本来の症状か副作用なのか、わからなくなつて当たり前でしょう」

「ですから、誤診の上に誤薬を重ねないよう、医師は問診

のとき』どこかで薬をもらっていないか』と必ず聞くべきです。多剤投与の副作用が考えられたら、一度すべての薬をとめて本来の病気をつかむのも大切な手法です」

食生活改める必要

さて、四方八方問題だらけの難問だと理解できませんでした。けれど、一体どうしたら薬害を抑え込めるのか、ポイントを整理していただきたい。

「やはり根本は医師教育の出直しです。米国では十年ほど前から臨床薬理学講座が各大学に作られ、生活環境と体質の変化に見合った薬の使い方を教えています。というのに、わが国では歯科医の書いた処方箋を調べると、記載された病名と処方薬の内容がまるで違っているものがいくらでも見つかったりする。医薬分業が進まない一因をそこに見ますし、道は遠くても、初歩の初歩から出直さねば薬害を減らすことはできません」

また、大学も企業の研究機関も副作用事故が予想できる場合は、もつと情報を公開することです。企業からの委託研究が多くても、大学は是非々々主義で真実を明らかにすることです。それが結局は薬事紛争を少なくし、企業にとってモブ

ラスになると思います」

患者側の自衛策としては、副作用を起こさない体質づくりを心がける。これが第一でしょう。横浜の中学校で調べたら三年間に六回と三回骨折した生徒がいた。いずれも、即席ラーメンを主食として自動販売機からジュース・コーラを飲み放題、甘いものをふんだんに食べていました。もう一、二回の骨折経験なら中学生になると珍しくはありません」

「今のままの食生活が続けば、がんなどの悪性疾患、奇形児、骨質・骨髄の弱化による血液疾患の多発、そして薬の副作用事故を起こしやすい体質の子が充満するだろう、と副作用予知学の立場から予言しておきます。いずれ、満員電車の中は骨折のけが人だらけになりかねない、と冗談ではなく真剣に心配しています」 (編集委員・藤田 真一)

注1 厚生大臣の諮問により昭和46年から中央薬事審議会が、42年以前に承認認可した医薬品の薬効再評価を続けている。すでに十五回の答申があり、医師が使う単味剤四百四十八品目、配合剤二品目が「無効」とされた。一般医薬品は53年度から審議が始まった。

注2 昭和8年版「広辞苑」第一版にカンフル注射は、重症者の血行を促進させ心臓まひを防ぐため樟脳しょうのつ液を注射することとあった。それが51年の第二版補訂版では「樟脳液を注射すること」とあった。それが52年の第二補

訂版では「樟脳液の注射。シヨック作用を有するため、かつて多用された」と、過去形に改められた。

以上のことをみて、私が少しも進んでいないと思った点をあげてみる。

高齢動物による薬理研究

三十年前、いまほど高齢者がふえるとは思ってもしなかったから、仕方がないかもしれないが、いま薬理学でどのくらい老人薬理学を教えているか。大部分のクスリに老人注意と記してあるが、具体的にどうすればいいのか、使用するなどということなのか不明である。

そのことを正しく教えられないのは、新薬を若い動物の研究が中心で、高齢動物で研究していないことが多いことが背景にある。これだけ高齢者がふえてきたからには、至急、高齢動物実験を行うべきである。

高齢者は合併症が多いから、多剤投与になるので、複合作用の注意、長短も知っておきたい。

精神用剤の研究

高齢に限らず、心の異常者が激増しつつある。抗不安・抗うつ目的で使われるクスリの臨床薬理が不足しているので、

内科医の乱用から事故がおこっている。

タミフルの若い人での突発現象なども、いち早く薬理で中枢作用を研究すべきであったが、ついになぜか口を閉じたまままで知らぬ顔をしていた。

薬理不要論、生化学で間に合つといわれても仕方がないようでは非常に悲しい。

サプリメントとの相互作用

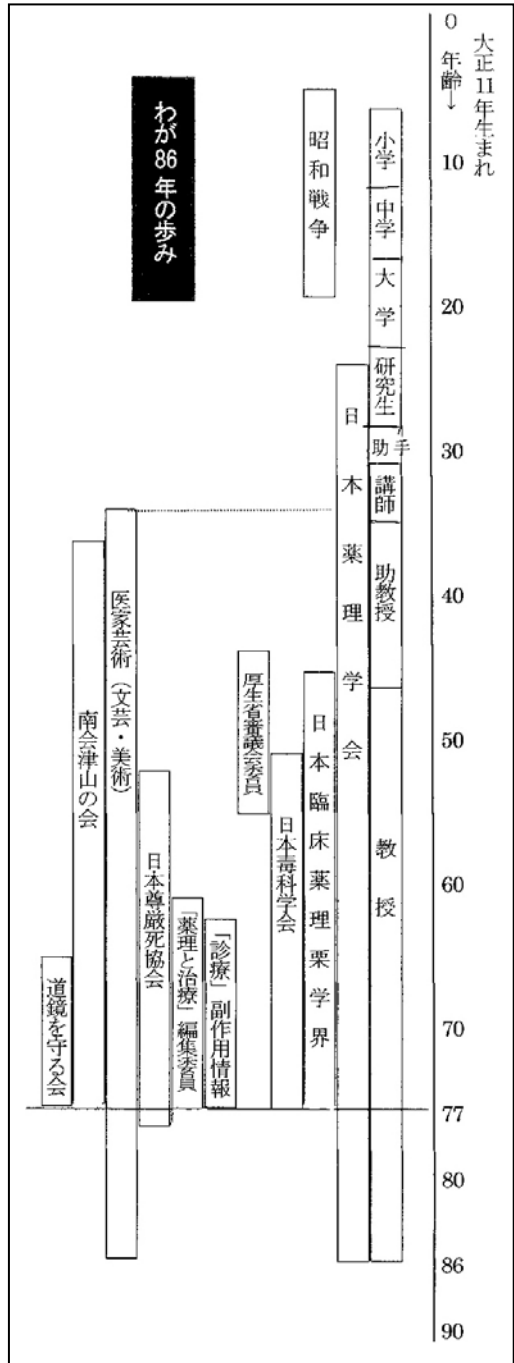
サプリメントが盛んに使われるようになったのを、医師は見て見ぬフリをしているようだ。アガリスクについては、日大医学同窓新聞（18・3・25）で、こつ論じたこともある。

アガリスクの制癌と発癌

痴呆が認知に、全滅が玉碎に、日本語が変わったのは驚かないが、アガリスクが発癌するというのに変わったのは、驚かないわけにはいかない。

二月十四日の各紙が、「アガリスクに発癌促進作用」の見出しが現われたのは、健康食品がサプリメントに変わっても驚かない人も、ビックリした。

アガリスク（姫松茸）の生および乾燥子実体から得た成分をザルコーマ百八十固型癌などを移植したマウスに、経口投



与して極めて高い癌抑制率を示すことは周知だが、活性本体が、グルカンといわれながら、その含有量の高いものが、低いものより有効率が高くないこともあって、すべてが明らかにされてはいないらしい。

しかし、そんなこととは関係なく、ヒトがアガリスクを5g/60kg/600ml/dayの用量で九十日間連続飲用したところ、T細胞 NK細胞の数の増加による免疫増強作用が確認されている。そのような情報を知ってか、アガリスクは約三百五十億円の世界で、ひそかに医療関係者の使用も多いという。

おりから、前記のニュースである。

読んでみると、厚生省が国立医薬品食品衛生研究所に、これが肝障害を起こす疑いが学術誌にあったので、毒性試験を依頼した。その結果、三社のうち一社のものだけが「他の発癌物質（そのものは未公表）に働きかけて発癌を促進する作用があると確認された」というのである。

これは何を意味するのであろうか。

一社だけが、姫松茸取り扱い中に、何かの発癌物質を加えてしまったことなのか。新聞には、「塩など多くの食品で確認

されている発癌を促進する作用……」とも書いてある。たしかに、塩も長期大量投与すればラットにも発癌してくる。姫松茸洗浄中に塩が混入したりして、その発癌性を増したのだとすれば、アガリスク使用中は、塩気をひかえないと、制癌効果が弱められるかもしれない。

サプリメントは企業が素人考えで主成分以外に価格を上げる目的で、各種のものを混合することも多いので、それらのものと、茸グルカンが結合して思わぬ発癌性が芽生えたのかもしれない。

いずれにしても、私たち薬品副作用予知学の立場からは、面白い問題と想っている。

一般のかたは、医学部薬理学でこそ抗癌剤などを集中的に研究していると思っているが、なぜか日本の医学系薬理学では、不思議なほど抗癌作用には一般に関心が無い。薬学会の演題を見ればすぐわかる。まれに熱心に研究している人はいるが、殆んど見当たらない。

農学系のキノコ類の抗癌研究は本格的だが、医学系でないので臨床例が得られないから、苦勞している。日本にヘンな所が沢山あるのは、島のせいかもしれない。

日本医事新報のこと

ふとした縁で医家芸術の創刊号からお世話になり、私の本業の薬理学の次に長続きしたものが、道楽の医家芸術になつてしまった。

こんなことは日本医事新報にでも出せばいいのかもしれないが、初代の梅澤彦太郎氏の頃と違つので、やめることにした。梅澤氏は医家芸術誕生の頃も非常に協力的だったので、いつかも次の話をのせたことがある。

「日本醫事新報」秘話

この雑誌は私より一つ年上の大正一〇年生まれなので、何となく親しみを覚える。別の雑誌で創刊からよく知っているもので、昨年50周年になつたものがある。ふと思つたのだが、前者は80年経つたのに隆々として栄えている。後者は昨年から合併号を出したりして、少し怪しくなつてきた。雑誌でも、脈が飛ぶよつになつてくると予後を考えてしまつ。

後者も創刊号から熟読しているので気が気でないが、両者はなぜこの差を生じたのかと思つた。両誌は性質が違つ内容で、私は一読者にすぎないが、できれば後誌も回復してもらいたいので、前誌の健康ふりを参考にしたいと思つたのである。

私が駿河台の日大にいた頃、恩師・寺田文次郎教授の所へ井上廉太郎さんという珍しい名前の紳士が時折訪ねて来られ私とも懇意になった。井上さんは『医局と薬局』という雑誌を創刊したので、その頃の医学雑誌の世界に実に詳しくかつた。

望に添えるために「メデイカル・エッセイ」欄が用意されているし、「新辺開話」や「緑陰隨筆」特集の息抜き欄もある。

『総合雑誌だからなり前といえはそれまでだが、以上のほか医政問題を中心としたニュース欄、求人や不動産、結婚の案内まで、医業の継続に必須の情報はこの一冊で完璧』といわんばかりである。



初代社長・梅澤彦太郎

処遇等々、お見届かはないとい、戦後すぐの頃、青年を社員とし、ことがあった。その界に尽くすべき、障害者の雇用を進めるのはむしろいい、早速森など、人皆家

からだだけではその正否のきかねる。だから誤植はい、梅澤社長は校了とな刷りには自身で必ず目を誤植替無を目標にされた。

井上さんの話はさらに結今も印象に残っている。社長は名伯楽だという点社員、一人一人の個性を見、適材適所の配置、硬軟使

「日本醫事新報」 4168 の誌面から

井上さんは当時七十歳くらいだったが、練馬から神田まで年中出て来て、日大薬学科の先生とも親しかった。

ある日、井上さんに『日本醫事新報』の話をしたところ、「あの会社はたいしたもんですよ」という。「梅澤彦太郎さんという社長が偉い人です。それに以前、海軍の将校だった人物が、たいへんな懐刀に活用したというもっぱらの名の意味は、いさぎよい、私欲がないことだというが、本当なら『醫事新報』は『医局と薬局』の競争相手なのに、話し相手がまだ若僧だった私なので気を許したのが、懐刀という人物に興味を持った私にいろいろ教えてくれて、とても面白かった。

井上さんは懐刀の本名は知らなかったが、以下、海軍の短剣をもじってKと仮称する人から井上さんが聞いた話である。

井上さんによると、梅澤さんは以前ある医学雑誌社に勤めていたという。そこをやめて今の墨田区両国で新会社を始めた。当時、雑誌の発行日には荷車を引いて両国橋の急な坂道を対岸の郵便局まで運ぶのだが、その時、互いに車の後ろを押して助け合ったのがミツワ石鹸社長の三輪善兵衛氏だった。

梅澤さんは雑誌の出版に異常なまでの情熱を傾け続けた。

太平洋戦争の末期、物資は窮乏を極め、印刷用紙などの配給も極端な減量を強いられて、多くの雑誌は休刊や廃刊を余儀なくされた。そんな中でも発行を続け、終戦後は銀座の焼け残りのビルに単身寝泊まりしながら他社に先駆けて復旧に努力した。

編集者は足で稼げという。人脈の多さが勝負を決めるともいえる。ある社員が取材で訪れた相手教授は不在であった。帰途、梅澤社長にバツタリ会い事情を伝えると、社長は、それなら「名刺だけでも置いてくる」といつて教授の所に行った。凡人なら不在を知ったらそこから引き返すだけなのに。

医学界は一口でいえば、各講座教授を頂点とした家族意識の強い世界だ。だから、教授を攻略しさえすれば勝負はあったも同然。この辺の事情に精通した梅澤社長が企画した典型の一つが「内科懇話会」といつ勉強会である。この会はもともと東京大学内科教授の福田龍吉氏に物を聞こうという門下生の集まりであった。

読者のニーズを的確に掴んだ企画として成功したのが「質疑応答」欄である。通信手段の限られていた時代、地方開業の医師にとって、問題解決の唯一の手段として利用されたといつたらいいすぎか。質問は医学関係だけでなく、生活百般にわたり、しかも回答作成まで最短期間でといつのが至上命令とか。そのために医学雑誌としては珍しい週刊誌

の誕生になったようだ。

医師の中には文学的作品に興味を抱く人が少なくない。その要望に応えるために「メディカル・エッセイ」欄が用意されているし、「炉辺閑話」や「緑陰隨筆」特集の息抜き欄もある。

総合雑誌だから当たり前といえればそれまでだが、以上のほか医政問題を中心としたニュース欄、求人や不動産、結婚の案内まで、医業の継続に必須の情報はこの一冊で完璧といわんばかりである。

ある教授が「日本醫事新報」は安心して読める雑誌だといわれた。それは誤植がほとんどないので信頼が置けるというのである。誤植の多い出版物に出会うと、その記事の内容までがいい加減に思えてくる。薬用量の数字など文脈からだけでその正否の判断はつきかねる。だから誤植は許されない。梅澤社長は校了となったゲラ刷りには自身で必ず目を通して、誤植皆無を目標にされたといつ。

井上さんの話はさらに続いたが、今も印象に残っているのは、梅澤社長は名伯楽だといつ点である。社員一人一人の個性を見極めての適材適所の配置、硬軟使い分けの処遇等々、お見事といつほかはないといつ。

戦後すぐの頃、隻手の青年を社員として迎えたことがあった。その時「医界に尽くすべきわが社が障害者の雇用を積極的に進めるのはむしろ当然だ」といい、早速義手を与えるなど、人情社長の面を覗かせた。

同じ頃の入社員にちよつと変わった男がいた。それが先に述べたKだが、面接で「一、三のやり取りの後」「どのくらい給料が欲しいか」と聞かれたKは、「それはそちで決めて」と使って役に立たなければ給料はいりません」といつてのけた。面接委員一同呆気にとられた様子だが、社長の一声で即決採用となった。

入社後のKは、トラブルの事後処理とか気むずかしい執筆者への取材とか、誰もがとかく敬遠しがちの仕事があると進んでこれを引き受け、次第に重宝がられる存在となった。このような仕事ぶりは軍隊時代に身につけた要領のよさだと後に洩らしていたという。

もう一つ、Kには、肩書には一切こだわらないという、おかしな性格があった。だから彼は主任とか課長などという役職名の入った名刺が大嫌いで、使ったことがない。これは、どうもKが役職名なしの名刺を使って、相手の態度から人格テストをして楽しんでいた節がある。

そんな平社員同様の名刺を持って訪れた厚生志者のお役人に、役不足を理由に軽くあしらわれた話がある。それは医師国家

試験の合格者発表をめぐってルール違反があったと呼び出しの電話がかかった時だ。Kは早速担当課を訪れ、「まことに相済みぬことをいたしました」といつて頭を下げながら例の名刺を差し出した。すると、案の定、「あなたじゃ駄目だよ、社長が専務をよこしなさい」といつ言葉が返ってきた。

「こんなジャジャ馬もどきのKをつまく使いこなす術を梅澤社長はちゃんと心得ていたのだから、かないませんねえ」と、井上さんがつくつくいつていたのを、昨日のことのように思いだすのであった。

日本醫事新報 4168(2004年3月13日発行)掲載

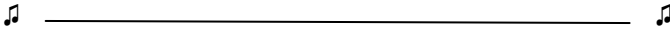
2008年11月25日 日本医事新報社転載許諾

あとがき

年寄りにはそれなりの価値があることを考え、少し過去のことをまとめてみた。ゴミでさえ埋め立て資材に役立つこともある。ゴミのおかげで滑走路ができるのだ。

(20・7・3記)

ミレイユ・マチューのオランピア・ライブ



KAORIIさんへの手紙

海山道人

いつもごステージのご案内をいただき、ありがとうございます。せっかく親切にご連絡していただいても、なかなか時間がなく、お店にお寄りできません。申し訳なく思ってい

ます。

また、今回は初めてのバースデイコンサートとのこと、是非おつかがいたしたいとは思うものの、多分、時間がとれないでしょう。

その埋め合わせというには変ですが、お誕生日のお祝いに、1枚のCDをお贈りします。

あなたの何度目かのステージで、ふと心の中に思い浮かんだことがあります。小柄な体。かわいい顔。一生懸命歌うその姿。そう、僕はある歌手を思い出していたのです。

ミレイユ・マチュー。

若いあなたは多分ご存じないでしょう。今を去ること約35年前、「フレンチ・ポップスの太陽」というキャッチフレーズで、彗星のように登場したシャンソン歌手がいました。まだ十代の若さながら、エディット・ピアフにそっくりな声、そっくりな歌い方。のど自慢大会を勝ち抜いてきた歌唱力は、たちまち大きな話題を呼び、ポール・モーリア、フランシス・レイ、クリスチアン・ゴッベールなど、当時のフランスのポップス界の大御所たちが、競って彼女のために曲を書き、伴奏を務めたのです。

彼女の歌は、本当にエディット・ピアフそっくりだったのです。

当時のフランス人にとってエディット・ピアフはとても大

きな存在でした。彼女の才能、彼女の人間性、彼女の生き方、彼女の人生観、彼女の男性遍歴、麻薬、アルコール……。すべてが畏敬的でした。その人氣は、彼女の人生の中の、正の部分も負の部分も含んだところに存在していたのです。生活のために身体を売ったこと、次から次へと恋の相手を変え、自分のものにした後は首根っこをつかんで離さなかったこと、その恋人たちの才能を見出し、それぞれ開花させて素晴らしき未来を彼らに提供してやったこと……。

彼女に惚れ込んだ男性も多く、詩人のジャン・コクトーなどは、ピアフが死んでしまったというニュースが流れると、そのショックで心臓発作を起こしてこの世を去ってしまったほどでした。

さて、ミレイユ・マチューです。彼女の声は確かにピアフにそっくりです。声量もあり、歌は抜群にうまい。

けれども、マチューには、エディット・ピアフの持っていた負の部分が見られません。「真つ白なキャンパスを持つ、けがれを知らないエディット・ピアフ」。ポップス界に身を置く人たちにとっては、こたえられない事だったでしょう。マネージャーのジョニー・スタークが彼女を輝かしくデビューさせ、最高レベルの作曲家たちに曲の提供はもとより、プロデュースも依頼し、かくて「フレンチ・ポップスの太陽」ミレイユ・マチューが誕生したのです。

小生はデビュー当時の彼女が好きで、レコードが出れば必ず買い、何度も何度も聴き、次のレコードがいつ出るか、いつでるか待ちわびたものでした。

ここに同封したCD（レコードからのコピー）は、彼女のオランピア劇場でのライブを収録したものです。彼女は1965年にオランピア劇場に初登場し、大成功を収めました。その成功により、1966年9月に再び、1967年12月に三たび、同劇場でコンサートを開きます。この録音は、第三回目のコンサートを収録したものです。

彼女の声は、お聞きのようにきわめて個性的です。けれども彼女の性格は、個性的というよりは、歌のうまい普通の女の子という感じですが。彼女に固有の個性を与えることは、彼女にとっても、彼女の周囲の人たちにとっても急務でした。彼らはよってたかつて彼女に「個性」を与え始めます。

このレコードでの、ほぼ全ての曲が、彼女の個性づくりに一役買っているのはお分かりでしょう。例えば、第10曲「私のアクセント」は、マルセイユの近くのアヴィニオン（アヴィニオンの橋で有名）出身の彼女のアクセントを題材に取り上げ、むしろそれを誇らしげに歌うことによって、明るく生きよつとする彼女を前面に出しています。

終曲の「愛の信条」は、一途に信じる愛を貫くという決意を、また本当の恋も知らないであろう彼女が、熱意を持つ

て歌いきっています。ここで歌われている愛は、現実世界のものではありません。日本語での名前の似ている、そして、制作時に明らかにその存在を意識したと思われるエディット・ピアフの「愛の賛歌」のような、本当の人生の裏付けはないのです。けれども、この歌をマチュールが歌って、まるで本当の世界のように思えてきます。

ポール・モーリアが「愛の信条」の伴奏を奏で始めたとき、マチュールの胸には激しい高鳴りと、あと一曲歌い終わったら終われるという緊張感・安堵感と、最後に全力を振り絞って歌おうという思いがなймаせになっただけでしょう。彼女がこの歌の第一声を放ったとき、「ウィ・ジユクローア（私は信じます）」と歌い始めたとき、客席の人たちはこの曲がフィナーレであることを確信したでしょう。百パーセント、いや百一十パーセントの力を出し切って歌う彼女に、客席の誰もが感動し、暖かい拍手を送っています。

そして、最後に再び「ウィ・ジユクローア」という言葉で歌い終わった瞬間、会場は拍手と歓声の嵐に沸きかえります。一旦音を止めたポール・モーリアが、再びタクトをとって「愛の信条」のメロディーで優しく彼女を包み込んだとき、彼女は何を思ったでしょうか。

コンサートは成功したのです。晴れがましきとうれしきで彼女は胸がいっぱいになり、満場の拍手を受けてきつと泣い

ていたでしょう。僕にはそう思えてなりません。

これが彼女の頂点でした。その後の彼女は、マネージャーのいつとおりの道を歩き、取り立ててスキャンダルもなく現在に至っています。上品で力強い歌声は健在ですが、もうあのような感動を人に与えることはありません。エンニオ・モリコーネの曲を歌っている彼女しか知らない人は、彼女にこんなにも光り輝いていた時代のあつたことなど、想像もできないでしょう。

冒頭にも書きましたように、僕はあなたのステージを聴いてミレイユ・マチュールを思いだしたのでした。あなたは彼女をどう思われるでしょうか。

この1年ぐらのお店にお邪魔していませんので、今のあなたを僕は知りません。想像するしかないのですが、きつとお上手におなりなのでしょうね。いつかまた訪れる機会があるのを楽しみにしています。

お店の皆さんによくお伝え下さい。
バスティン・コンサートの成功を祈ります。

海山道人

ミレイユ・マチュールのコンサートについて

ミレイユ・マチュールは、1947年生まれのパリのフランスの

歌手。南フランスのアヴィニオンに、墓石を彫る貧しい石工の子として生まれた。13人兄弟の長女で、幼い頃から母を助けて弟・妹の面倒をみながら成長。オペラ座の合唱団で歌っていた祖母の影響を受けて、歌が大好きになり、特に、ラジオで覚えたエディット・ピアフの歌を全て暗記して歌っていたという。1964年に市のアマチュアのおど自慢大会に「愛の賛歌」で応募。決勝で「バラ色の人生」を歌って見事優勝を飾った。

1965年にパリにでた彼女は、11月21日「テレ・ディマンシュ」というテレビの人気番組でピアフの「ジェザベル」を歌い、絶賛を博した。これを見たジョニー・スタークは、間髪をいれず彼女と契約し、大宣伝を打って売り出した。音楽上の指導をポール・モーリアに依頼し、1966年に「愛の信条」でデビューさせて爆発的な人気を獲得。歌手としての地歩を固める一方、「マイ・フェア・レディー」を地でいくよつな教育を行い、短期間の間に、田舎娘を大スターに変身させた。

以後の彼女は、スタークの敷いた路線をひた走り、数々のヒット曲と多くのアルバムを出した。近年日本では注目されることは少ないが、ヨーロッパでは根強い人気を持っている。ここで紹介した「ミレイユ・マチューのオランピア・ライブ」と題されたアルバムは、1967年12月の第三回目的パ

リのオランピア劇場でのコンサートを収録したもの。最初から最後までものすごい熱気に包まれたコンサートで、聴き手を圧倒する。伴奏はポール・モーリア指揮のオランピア劇場オーケストラ。現在は廃盤

以下に、その概要を紹介する。

1. オープニング（パリは燃えているか？）（モーリス・ヴイダラン作詞、モーリス・ジャール作曲）

1966年製作の同名（パリは燃えているか？）のフランス映画の主題歌。この映画は、ルネ・クレマン監督、ジャン・ポール・ベルモンド、アラン・ドロン、イヴ・モンタン、カーク・ダグラスなどとの豪華なメンバースタッフが出演しており、モーリス・ジャールが音楽を担当。華やかな前奏に続いて、颯爽と飛び出してくるマチューの歌唱は、このアルバムの冒頭を飾るにふさわしいもので、最初から全力で歌う彼女に思わず拍手を送ってしまつた。

2. ふるさどに思つ（アンドレ・パスカル作詞、ポール・モーリア作曲）

外国旅行からの帰りに機上からふるさとフランスの風景を眺めながら、自分の生まれ故郷への思いを吐露した内容。その思いを濃厚ににじませて歌うマチューの歌唱は懐かしさ

にあふれている。

3 愛し合う私達 (フランク・ジェラルド作詞、クロード・ポラン作曲)

地球が回り続ける限り、わたし達は愛し合っていく、という単純な内容の歌だが、幸せいつばいで歌う彼女に微笑ましい人はいないだろう。作曲者のクロード・ポランはジャズ系の人でこの曲もややジャズっぽい。

4 愛してくれる人 (エディ・マルネー作詞、ポール・モリア作曲)

歌詞は、人を愛すること、愛されることの喜びを美しくつづっている。ゆつたりとした叙情的なメロディーに乗って、彼女はスケール大きく、じつくりと歌いこんでいく。

5 わが友ピエロ (ジャン・ブルツソル作詞、ジェラルド・グスタン及びサツシャ・ディステル作曲)

ルノーの自動車工場で働いているボーイフレンドのピエロ (ニックネーム) との結婚を夢見る少女の心情を詩にしたもの。小さな少女の小さな夢を、マチューは愛情をこめて歌っている。

6 あの声をきいて (ピエール・ドラノ作詞、アンドレ・リヴェルノー作曲)

情感豊かでしみじみとしたこの歌は、実は生まれたばかりの赤ちゃんへの歓迎の言葉からなっている。このようなバラード風の歌にもマチューの声はよくマッチし、聴くものに共感を覚えさせる。ピエール・ドラノは、ジルベール・ベコールの歌の作詞者としても有名。

7 ラスト・ワルツ (レス・リード作詞、バリー・メソン作曲)

当時エンターテイナーとしてきわめて有名だったエンゲルベルト・フンパーディンクの大ヒット曲。マチューの歌唱は本家のフンパーディンクを上回る迫力。フンパーディンクはイギリスの男性歌手で、その名はドイツの作曲家の名前をもらったもの (本物のエンゲルベルト・フンパーディンクはオペラ、ヘンゼルとグレーテルを作曲したことで有名な人)。

8 今夜愛し合う (ピエール・アンドレ・ドゥーセ作詞、クリスチャン・ゴベール作曲)

おそらく、第 部の冒頭なのである。短い序奏にのって力強く歌い始めた彼女の声は、愛し合う恋人たちの心を、はちきれんばかりの喜びに満ちた歌で表現している。

9 私のアクサン(ガストン・ボヌール作詞、ポール・モ
ーリア作曲)

彼女が生まれ育ったマルセーユの近くの土地には、特有の方言(アクセント)がある。このアクセントにからめながら、ふるさとの風景を一つ一つ挙げて歌っていくマチューは、劣等感を持つことなく、誇りに満ち、むしろ得意げに歌っている。

10 夜明け(ガストン・ボヌール作詞、ポール・モーリア作曲)

この曲は、1917年のロシア革命をテーマにしたもので、そのときの市民たちの思いと決意を感動的に歌い上げたもの。歌の内容は決して軽いものではないが、元気のよいマチューの声を聞いていると、革命の歌であることを忘れてしまう。

11 わたし(ジョルジュ・フロンサク作詞、ボレル・クレール作曲)

1936年のフランス映画『シュヴァリエの流行児』の主題歌で、主演のモーリス・シュヴァリエの十八番。人生は自由気ままに生きればよいのさ、というテーマで書かれたこの曲を、マチューはシュヴァリエとはまた別の持ち味を出して

歌っている。

12 恋を想つとき(ジャック・ドウルマニエ作詞、ラルフ・アーニー作曲)

恋をしたときの幸せな気分を、軽やかなメロディーに載せ、夢見るように歌つマチュー。このときの彼女が恋をしていたかどつかは不明だが、その歌唱からは本当に幸せな気分が伝わってくる。

13 愛の信条(アンドレ・パスカル作詞、ポール・モーリア作曲)

コンサートの最後を飾るこの曲は、このアルバムで白眉である。1965年、アンドレ・パスカルの作詞、ポール・モーリアの作曲。この曲の大ヒットにより、マチューは一躍大スターになった。それは、序奏が始まったときの観客の熱狂ぶりによって良く分かる。「ウィ・ジユクロア、私は信じます」と静かに歌い始めた彼女には、明らかにオーラが感じられる。まだ19歳なのに、このテーマを確信に満ちた歌唱で歌い進み、最後にもう一度「ウィ・ジユクロア」で歌い終わる。感動的である。